

昭和46年3月

魚津市石垣遺跡発掘調査報告書

魚津市教育委員会

例　　言

1. 本報告書は、昭和45年度国庫補助金及び県費補助金を得て、魚津市教育委員会が行つた魚津市石垣字大坊遺跡の第1次発掘調査の記録である。
2. 調査は富山県教育委員会並びに地元石垣部落（K・長谷口直二氏）の協力のもとに昭和45年6月18日より昭和46年3月31日の間にわたり行なわれた。
3. 調査団は別表のとおりであり調査に際しては文化庁記念物課抜官工柔善通氏や以下の諸氏の助力があつたことをここに記して謝意を表します。

発掘地提供　　魚津市石垣　石崎重正氏　谷口正雄氏　石川作治氏
休憩舎提供　　魚津市石垣　石崎重正氏　谷口良一氏
測量器具器材提供　　魚津市役所（市長　高野宗雄）
その他器材提供　　伊藤組（代表　伊藤其一氏）若島正敬氏

4. 本書の執筆は調査主任の指導のもとに大谷、広田、大久保が行なつた。
5. 遺跡測量並びに遺構実測図は山本正利、大久保が行ない大久保がトレースした。
6. 出土資料整理は大谷、広田、橋本、小島、四十崎悦子、長谷川千枝子、大久保が行ない、実測図は大谷、長谷川、大久保が行ないトレースは長谷川、大久保が行なつた。
7. 本書は石垣地区圃場整備事業に伴う緊急発掘調査の記録である。

魚津市石垣遺跡発掘調査団

団長	藤原平蔵	(魚津市教育委員会教育長)
副団長	菅原 隆	(魚津市教育委員会社会教育課長)
調査主任	姿義	(富山県考古学会会長)
調査員	大谷清瑞	(魚津市教育委員会教育委員長)
	広田寿三郎	(富山県考古学会員 魚津市文化財調査委員)
	京田良志	(富山県考古学会理事 県立八尾高校教諭)
	小島俊彰	(富山県考古学会理事 県立中部高校教諭)
	橋本正	(富山県教育委員会社会教育課主事)
	大久保義雄	(魚津市教育委員会社会教育課員)
調査補助員	山本正利	(明治大学生)
調査協力員	富山県立魚津高校歴史クラブ員	
	タ 新川女子高校	タ
	タ 滑川高校	タ
	タ 上市高校	タ
	タ 魚津工業高校	タ
	魚津市立東部中学校生徒	
	タ 西部中学校歴史クラブ員	
	魚津考古学研究会員	
	石垣地区有志	
事務局長	菅原 隆	(魚津市教育委員会社会教育課長)
事務局員	社会教育課員	

目 次

例 言

魚津市石垣遺跡発掘調査団

第 1 章 遺 跡	5
第 2 章 発 掘 経 過	7
第 3 章 遺 物	9
第 1 節 縄文式土器	9
第 2 節 石 器	10
第 3 節 その他の遺物	11
第 4 章 遺 構	12
第 1 節 住 居 址	12
第 2 節 炉 址	13
第 5 章 ま と め	14

図 版

図版 1



石垣遺石附近地形図

第 1 章

遺 跡

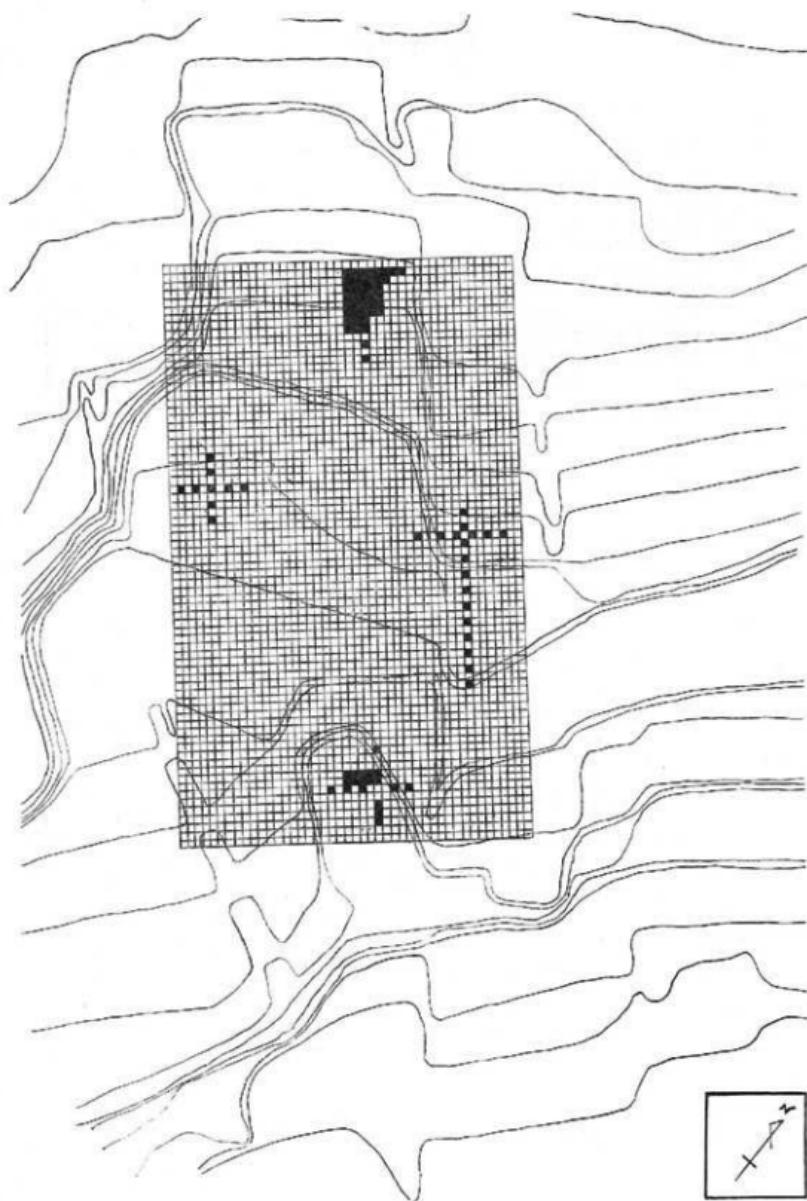


(魚津市東山より遺跡地を望む)

石垣遺跡は、魚津市石垣字大坊1.385番地を中心に面積215.700平方メートルに存在する。

同地は片貝川扇状地の段丘上にあり洪積期に属し、東西にはなだらかな傾斜で山地にのぼり、北方は高度40mの段丘崖上にあり、南方にはさらに高度40m程で石垣平畑地がある。なお同地は海拔135mで遺跡の近くを自然の小川が流れ、南方の山地は西南風をさえぎるのに良い位置にある。

本遺跡の所在は戦前より知られており、多くの人により遺物が採集されている。所属時代は縄文時代から歴史時代にわたつており、今次の調査では縄文中期の住居址、炉址、その他多数の貴重な資料が発掘された。詳細は各章各論にゆずることにしたい。



石垣遺跡地形図及び発掘区地点 S = 1/500

第 2 章

発 挖 の 経 過

昭和46年5月地元より圃場整備事業にとりかかるとの連絡があり、緊急に発掘を行なう必要が生じ、富山県教育委員会と相談の上、昭和45年6月18日・19日の両日にわたり、調査員の指導のもとに魚津西部中学校歴史クラブ員その他有志各位の協力を得て試掘調査を行なったが、その後の本調査の貴重な資料を多数発掘した。その結果をもとに4地区を設定し、測量クイ打を行ない、7月12日より本調査に入る。調査の最初は雨のため、テントを利用して発掘を進めた。

7月19日第3地点の表土下45cmくらいから木の実らしきものや、石器、土器片が多くなり、ついに第1号住居址の炉址を見つけるに至つた。これを機会に発掘も慎重に行なわれ、区を拡張のためベルトコンベアを使用した。ピットが多く見られるようになつた。第1地点は、表土より下20cmくらいから土器片が多くなり、掘り下げる事が困難なくらいであつた。

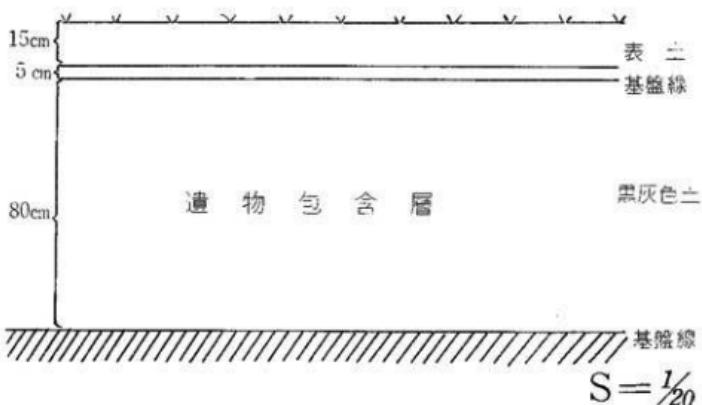
8月3日より第2地点の発掘にとりかかつた。表土より20cmくらいで土器・石器が多く出土し主に縄文式後・晚期のものであつた。尚石器が非常に多く特に砥石・石鎌・球形土器が多かつた。以後、第2地点及び第3地点を重点に作業を進める事とした。8月10日、第3地点より8個目の住居址が発見され、床面の測量等に合せて全体を出す作業を進めた。

8月20日、文化庁より工染普通技官が来島され指導を受けた。圃場整備事業主、地元民より調査を早くしてほしいとの要望が高まり、今年度の調査は8月31日迄とし、来年度も発掘調査を行なう事で脱得、県、市も納得する。

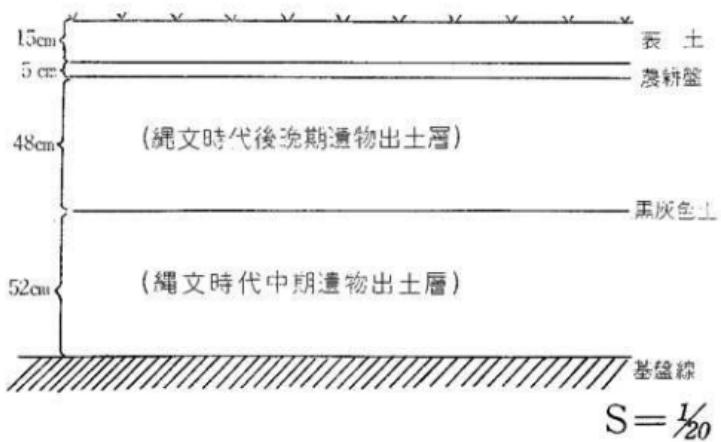
9月1日より遺物の整理を行つたが遺物の数が多く整理が思うように進まないままに報告書作成に至つた。

最後に、本発掘調査を行ない、調査員共々いろいろと勉強させてもらつた。結果今後の発掘調査の手がかりとしてこれを生かしたい。

第1・3・4地点平均地層図



第2地点平均地層図



第3章

遺物

第1節 繩文式土器

石垣遺跡より発掘された遺物は、整理期間が短かかつたため、注記しただけで未整理のまま報告する。

このたびの発掘は4地区を設定し、第1地点は標高135~136m、第2地点は標高138~139m、第3地点は標高132~134m、第4地点は136mの所にある。

このたびの発掘調査で発掘された土器については、縄文時代中期中葉から後晩期に至るまでの長い期間にわたるものが出土地したが、第2地点は主として縄文時代後晩期の土器等で、他の3地区からは縄文時代中期の土器等が出土地している。この遺跡より発掘されたものは縄文時代中期の特徴である豪放な竹管文のあるもの（図版7-1、図版12-1）縄文式土器としてはきわめて大型であるやに思われる。又牟田新式土器（貝穀文）も少數ながら出土している。氣屋式及び後晩期壺消文がかなり出土し、いずれも第2地点からである。この内、平皿と、かめはほぼ全形を知るにたる復原を見た。（図版10-16、図版12-12）その他蓮華文及び格子文が数点あるがこれは新崎式土器との結びつきが考えられる。

その他第2地点よりは注口土器がかなり出土している。（図版10-30-32）このように考えると後晩期の遺物は第2地点から多く出土していることがわかる。しかし（図版3一下段）により、後晩期の遺物が出土している層の下からさらに中期の土器が出土している事が、この度の発掘調査の注目すべき所である。

またこの第二地点は、西北隅に石を敷きつめたところ（図版22-上段）があつたがそれは何を意味するものであるかまでは追求されなかつたが、人意的に敷きめられてあることは明らかであるが、はたして原史時代のものなのか、また、石づき開田に際して行なわれたもののかは、明らかには出来なかつた。

しかしあびただしい遺物、ことに石器の多くはこの敷きつめられた石の中から出土して居り、後晩期の土器片の多くはこの中から出土した。

なお、この地点の地層断面図は次の通りである。（図版3一下段）。表土15cm、農耕盤5cm、後晩期遺物包含層48cm、中期遺物包含層52cmとなつてゐる。その他の地点は（図版3-上段）を参照されたい。なお土器については未整理のため図版を参照され、今後の第二次の発掘報告と合せて研究したい。

第2節 石 器

石器については小破片に至るまで注記を終つてゐるが、大きな分類により完、不完、器形、石質等によつて分類、整理し、通し番号をつける予定である。

次に、種類、員数等につき記する。

磨 製 石 斧

第1地点 (17個) 第2地点 (62個) 第3地点 (31個) 第4地点 (27個)

打 製 石 斧

第1地点 (27個) 第2地点 (102個) 第3地点 (49個) 第4地点 (41個)

石 錘

第1地点 (11個) 第2地点 (17個) 第3地点 (11個) 第4地点 (4個)

凹 石

第1地点 (4個) 第2地点 (32個) 第3地点 (15個) 第4地点 (2個)

石 棒 (石刀含む)

第1地点 (3個) 第2地点 (16個) その他表探 (1個)

磨 石

第1地点 (2個) 第2地点 (15個) 第3地点 (7個) 第4地点 (6個)

石 鍤

約35点、この中には石錐とみた方が良いものもある。

石 匙

石匙といいかねるものもあるが加工の跡がはつきりした石片であり一応この中に入れて見た。(図版18-4~7)

砥 石 (石皿)

これは非常に多く完全なものが3点、大型の不完全形8点を含め百数十個の砾石が出土している。磨跡を残したもの、又凹石のような凹をとつたもの等、種々である。(図版15-7~19、図版18-1~3)

そ の 他

小形3角柱が1点、玉が5点で各地点1個づつの発掘を見たが、いずれも表探であり、第1地点、第3地点、第4地点のものは完全なものであつたが、第2地点のものは不完全なものであつた。その他、魚類(鱈)の歯が第2地点、第3地点より1個づつ出土している。

次に石質、産地等について記して見ると、石斧は角礫凝灰岩、緑泥変岩、角岩、凝灰岩、頁岩、砂岩、石灰岩、閃綠岩、安山岩、蛋白岩、泥質絹雲母變岩等が用いられている。石鍤はほとんど砂岩のものが用いられているが、中に1点だけ頁岩製のものがある。これは化石(アスター)を含む珍らしいもので

この石は施川上流に産するとされており、石垣原住民の行動範囲がここまで及んでいたと思われる。

石錐及び石匙の石質はチャート、黒耀石、玉髓などの外に硬質の石材が用いられている。そしてこれらの石材は前述の頁岩を除いてはほとんど石垣の周辺に於いて求められるものである。

次に主な産地について記す。

チャート — 東城、池原、坪野、嘉例沢等

緑泥変岩 — 東城、池原、坪野、嘉例沢等

黒耀石 — 東城、坪野、大熊等

安山岩 — 黒谷、大熊、福平等

角礫凝灰岩 — 坪野、大熊等

石灰岩 — 布施川上流

閃綠岩 — 布施川上流

蛋白岩 — 布施川上流

泥質組成母変岩 — 片貝川上流、宇奈月等

玉髓 — 池原、布施川上流

主なものは上記にのべたようなものである。

第3節 その他の遺物

石垣遺跡より発掘された貴重な資料の中で第1節、土器、第2節、石器で紹介されなかつた遺物については次のとありである。

第2地点からは、29個の球形土器が出土している。（図版16-43～50、図版18-41～46）いずれも欠損していて完形品はない。又同じ地点より土偶の顔面が1個（図版16-51、図版18-40）、土偶の足が2個出土している。なおいわゆる軽石によつて作られた浮子の破片が第1地点、第2地点より採集された。

須恵器は各地点とも多少の発見を見た、がこれの意味するところは未だ把握出来なかつたが石垣を考える上において重要な資料であると思われる。又第3地点より魚類（鱗）の歯が1点採集された。その他、滑車型耳栓が6点、3cm角の三角形の疑問石器、径3cmの円形の疑問石器（いずれも信仰対象であろうか）が出土している。（図版16-10.11、図版18-14.15）

このようにさまざまな貴重な資料が発掘され、今後の研究に期待される。

第 4 章

遺 構

第1節 住 居 址

1. 住居址附近の環境

この地は片貝川扇状地の段丘上にあり、洪積期に属し、東西には、なだらかな傾斜で山地に上がり、南北には北方高度40mの段丘崖上にあり、南方にはさらに高度40m程で石垣平畑地がある。

なおこの地は海拔135mで、今度の発掘された住居址のそばを自然の小川が流れ、南方の山地は西南風をさえぎる良い所にある。このたびの発掘では、4地区を発掘調査したが、4地区とも住居址らしきものが発掘されたが、ピット、遺構の追求までにはいたらなかつたので、第3地点の住居址を中心にして報告する。

2. 住 居 址

第3地点では152mを調査し、地質は表土（植生土）15cm程でその下のローム層上に住居址があった。この地点では住居址が大小合せて8個発見された。その形は円形で直径4～5m位から直径8～9m程の大きさのものであつた。その時期は床面から伴出した土器及びうめがめ炉址の土器等から考えて、縄文時代中期と推定された。なお各住居址は重なつて発見され各々の全形は正確にはとらえられなかつた。しかし1号住居址のみは周構側壁は地形の関係から南方のみに存在した。ピットは数個の住居址が重つて存在したので何れの住居址のものか明確にしにくいものがあつた。

3. 1号住居址

形は直径4.8mの円形で方形石囲い炉址がその中央に位置しており、その炉址は12個の自然石で3方を囲み、北東があいていた。ピットは住居址内に18個もあつたが、この1号住居址に使用されたものは、8個程と考えられる。ピットの深さは30～40cmであつた。尚、周構は認められず、側壁は地形からして南西側に約30cmの高さで存在し、その上に5号及び3号住居址の床面が存在した。尚、この床面は踏みかためられたロームで、その深さは表土から1.2mの所にある。この住居址は、3号、5号、6号、2号住居址と入り組んでいた。

（図版5、図版6一上段）

4. 3号住居址

この住居址は、1号、2号、5号住居址と重つて半円形で残つて居り、その

中で特長のある部分のみを報告する。周構は一部認められその位置は地形の関係上南西方にあり、幅及び位置等は（図版5）を参照されたい。尚焼土は側壁に添い土器片を含み、木炭及び灰とともにかたまつて多量に出土し、当時のまま跡とも推定される状態であつた。

5. 4号住居址

この住居址は圃場整備事業のため削られて東半分しかなく、その特長ある部分を報告する。炉址はうめがめ式のもので縄文時代中期のかめであつた。その周辺を6個の自然石でかこみ、その周辺は焼土で木炭灰が多量に出土し、周溝は南方に一部分のみを残し、東南隅の大きなピット（4個）の中からは縄文時代中期の土器片が出土した。形、大きさ等は形状不完全のため（図版5）によつて参照されたい。

6. 7号住居址

この住居址も圃場整備事業のため半分しか残つておらず、その特長ある部分を報告する。炉址は圃場整備事業のため半分しかなく、3個の石匂いと焼土が認められた。東隅の側壁に添つて大きな貯蔵庫らしきものがあり、大きさは縦170cm、横90cmのだ円形で深さ70cmの横穴状の穴倉であつた。住居址の床面には多数の自然石が置かれてあつた。（図版5、図版6一下段）中には砾石も含まれており住居址の側壁をなしているものもあつた。

第2節 炉 址

1. 炉址の概要

このたびの発掘調査で発掘された炉址は6個であつたが、その内うめがめ炉址が2個、石匂い炉址が4個であつた。しかし石匂い炉址の1個は、圃場整備事業のため破かいされて半分しか残つておらず、外の2個は第1地点、第4地点から発掘されたが確認されなかつたので、第2地点及び第3地点の炉址について報告する。

2. 第1号住居址の炉址（第3地点）

第1号住居址のほぼ中央の床面をわずかに掘り込んで存在し、12個の自然石で囲まれ、南北40cm、東西25cmの長方形で北方があいている。その周辺は非常にかたく踏み固められていた。炉の内部は黒灰色に焼け木炭が多くその周辺は焼土でおおわれていた。（図版23-1、図版19-右上参照）

3. 第4号住居址の炉址（第3地点）

第4号住居址のほぼ中央にあり6個の自然石で囲まれた直形30cmの炉址であ

る。炉の内には縄文時代中期のかめがうめられており、深さ10cmで口縁部がなかつた。炉の床部及び周囲は焼土でその附近の床面は固く踏み固められていた。（図版19左上、図版23—2参照）

4. 第7号住居址の炉址（第3地点）

第7号住居址のはば中央にあり自然石に囲まれておつた。しかし塗場整備事業のためけずられて3個の石しか残つておらなかつた。炉の内部及び周囲は焼土で固つていた。（図版23—3参照）

5. 第2地点の炉址

7個の自然石に囲まれたうめがめ炉址で直径40cmの円形炉址である。うめがめは縄文時代後期の口縁部をかくかめで、大きさは直径25cm深さ15cmであつた。（図版10—16参照）この炉址の深さは15cmの耕上のすぐ下にあり、焼土や木炭等は発見されず、この炉址に対する住居址は確認されなかつた。この地点は後晩期の土器、土偶、注口土器、砥石、球形土器、石錐等が多く、又約60kgの石敷があつた。（図版23—4参照）

第 5 章

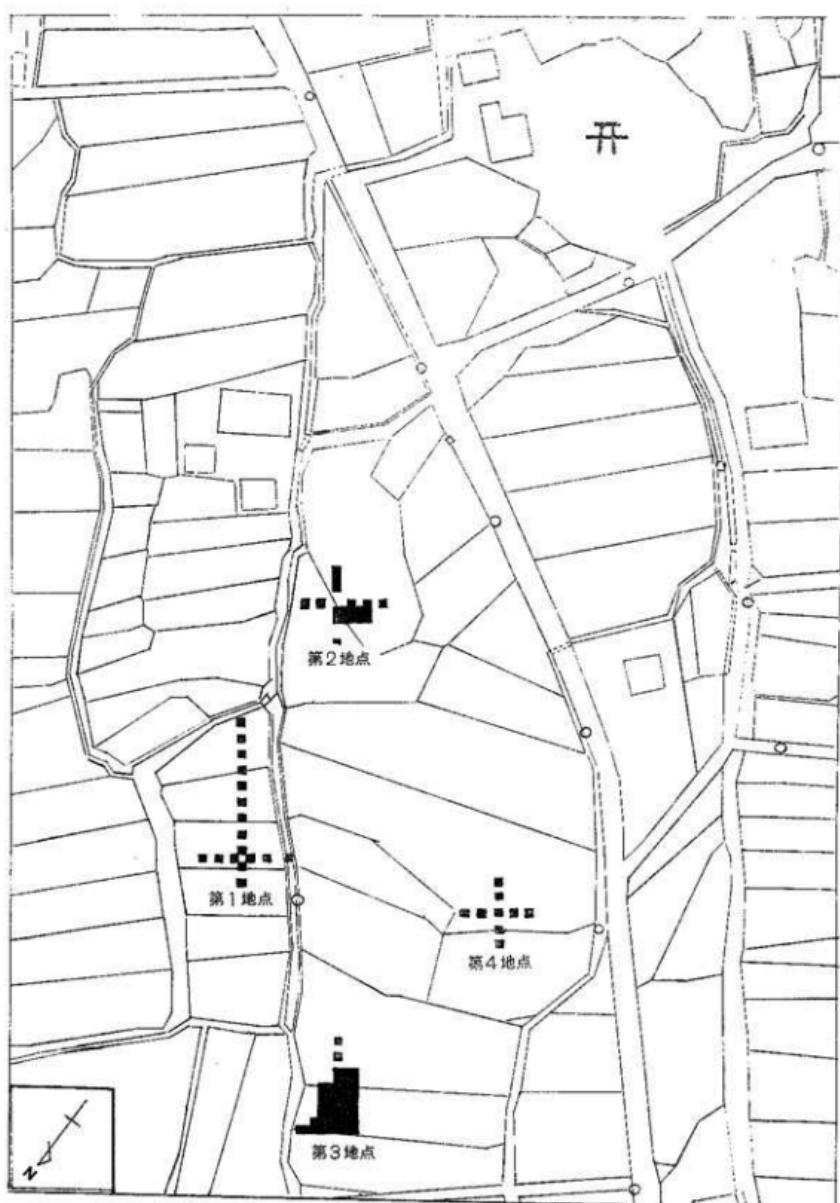
ま と め

本遺跡の発掘調査では縄文時代中期の住居址群の発掘及び、縄文時代から歴史時代にわたる長期間の遺物が発掘され、又他地域との交流を推し図り、更に広い面積をもつこの遺跡は貴重な資料であるとも言える。

魚津市にはたくさんの遺跡があるが、縄文時代の遺物としては天神山、桜峠、大光寺遺跡のものは以前に紹介されたところであるが、石垣遺跡のものは、天神山遺跡、桜峠遺跡よりやや新しく大光寺遺跡に近いかと考えられる。

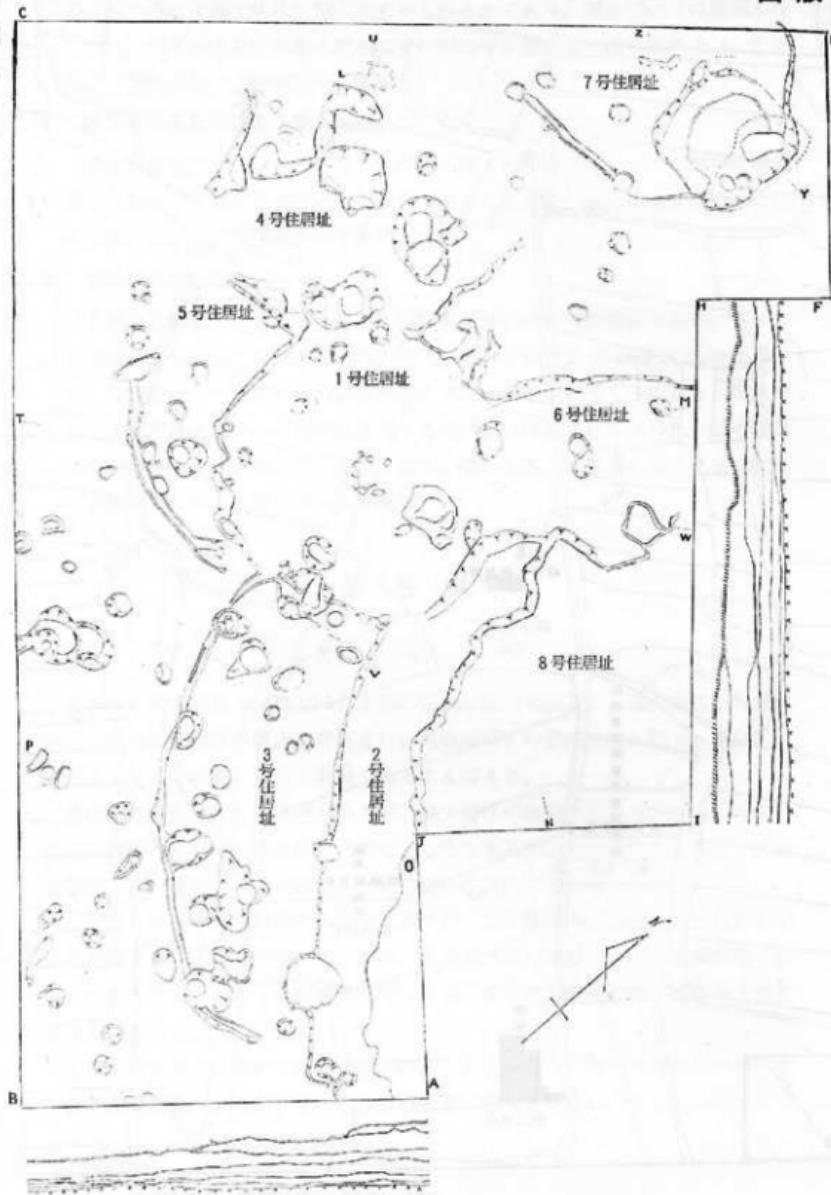
本遺跡の発掘調査は石垣地区塗場整備事業による緊急発掘調査であつたため追求の段階までに至らなかつた点もあり、又発掘された貴重な資料で本報告書で論じえなかつたものに対する研究等については、第二次発掘調査成果と併せて報告されるであろう。

なお本報告書では資料の紹介を中心に置いたため、その吟味考究にたりない点が多々あると思われるが、すべて後日の研究に期待したい。



石垣遺跡地形図及び発掘区 S = 1/1500

図版 5

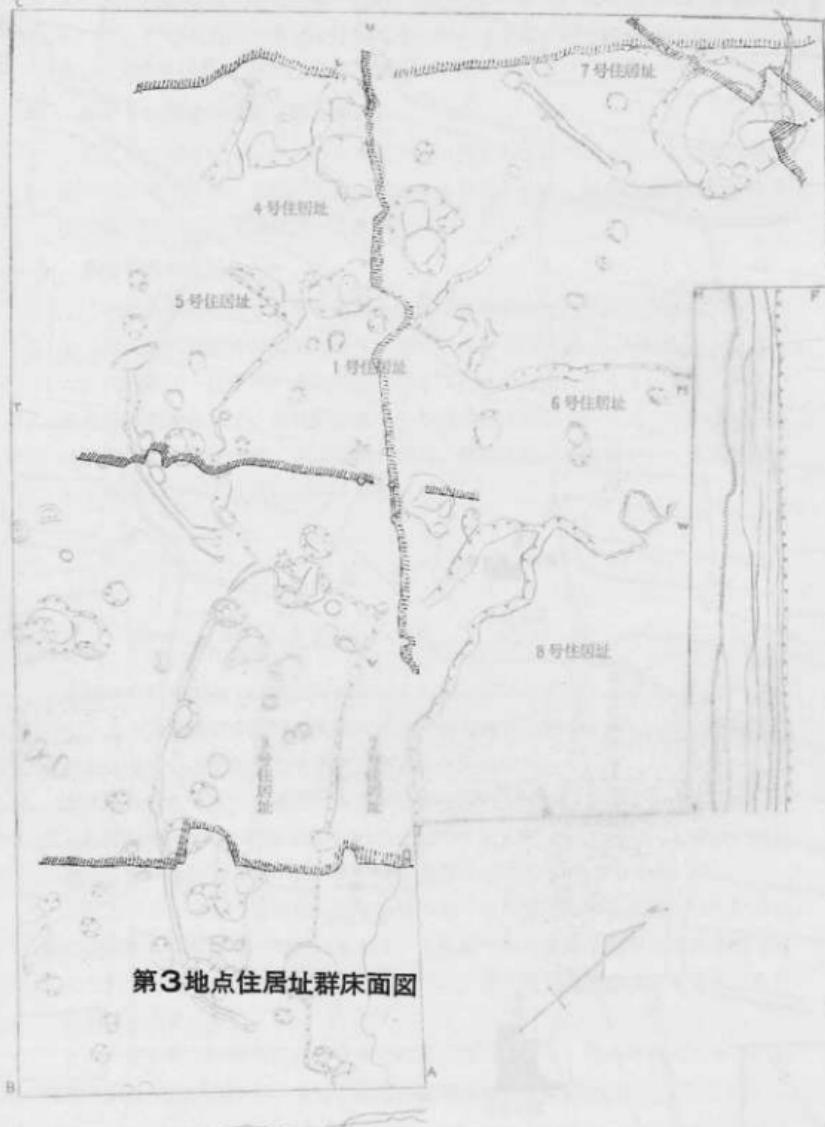


第3地点住居址群全体図 S = 1/60



第3地点住居址群平面图

図版 5

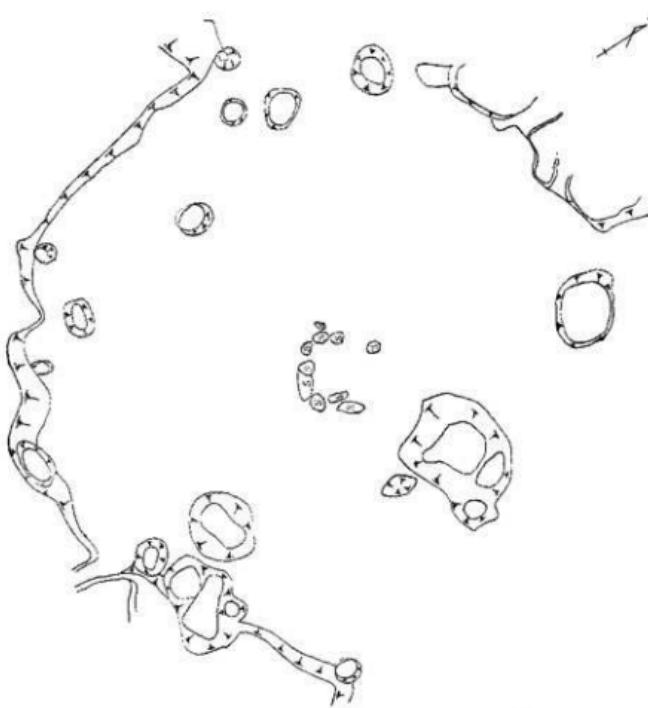


第3地点住居址群平面図

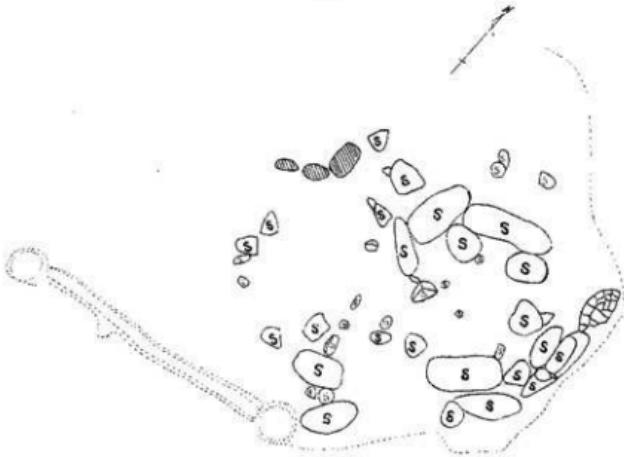
第3地点住居址群全体図 S=1/80

図版 6

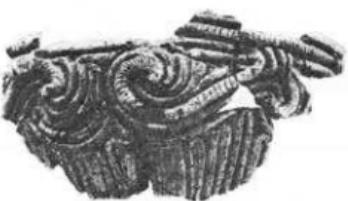
第一号住居址図



第七号住居址図



S = 1/40

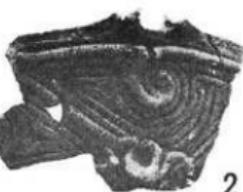


1

3

6

7



2

4

5



8



9

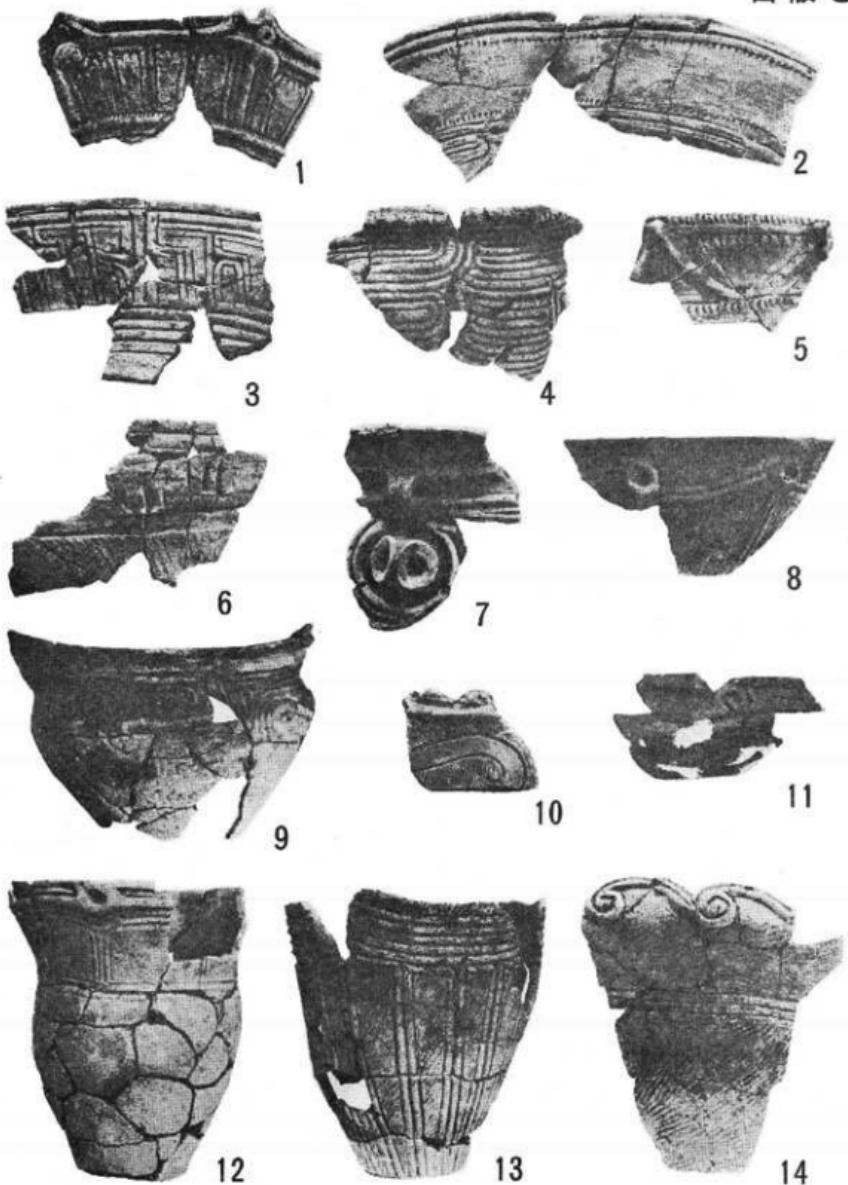


10

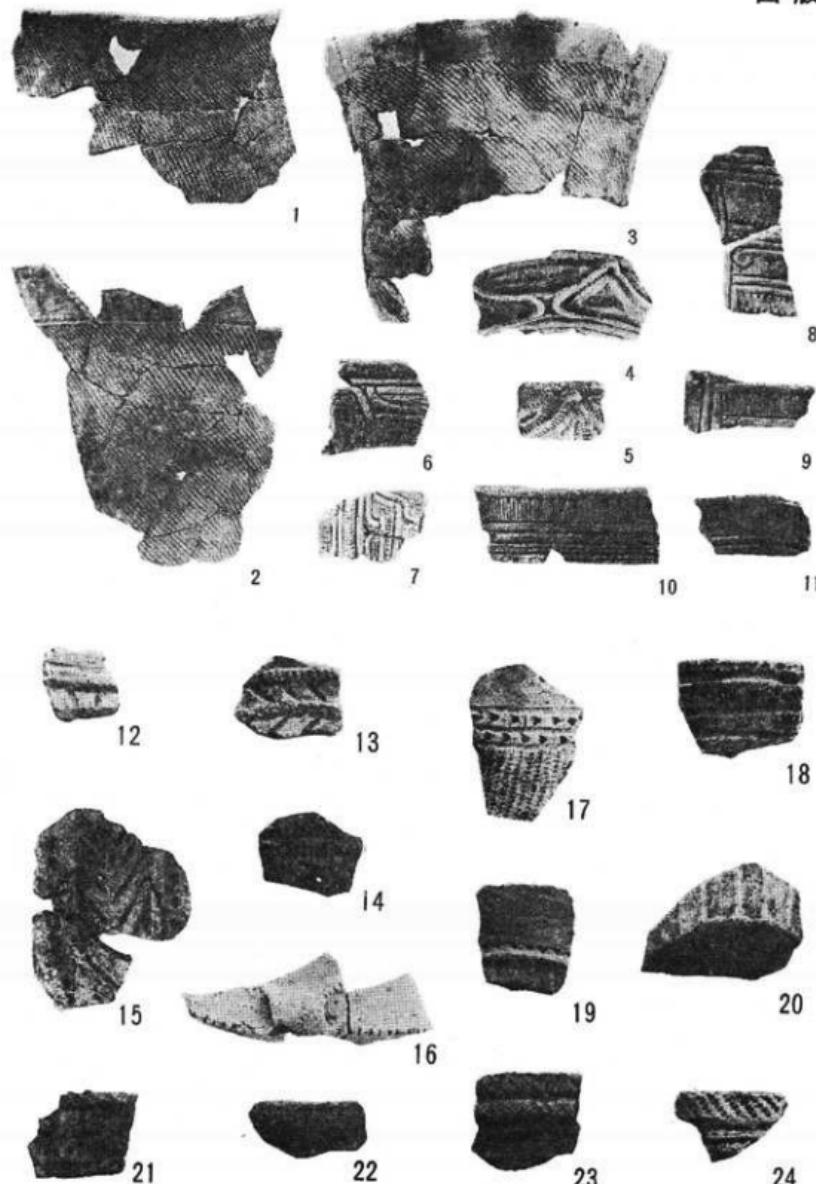


11

縄文時代中期中葉の土器 S=1/4

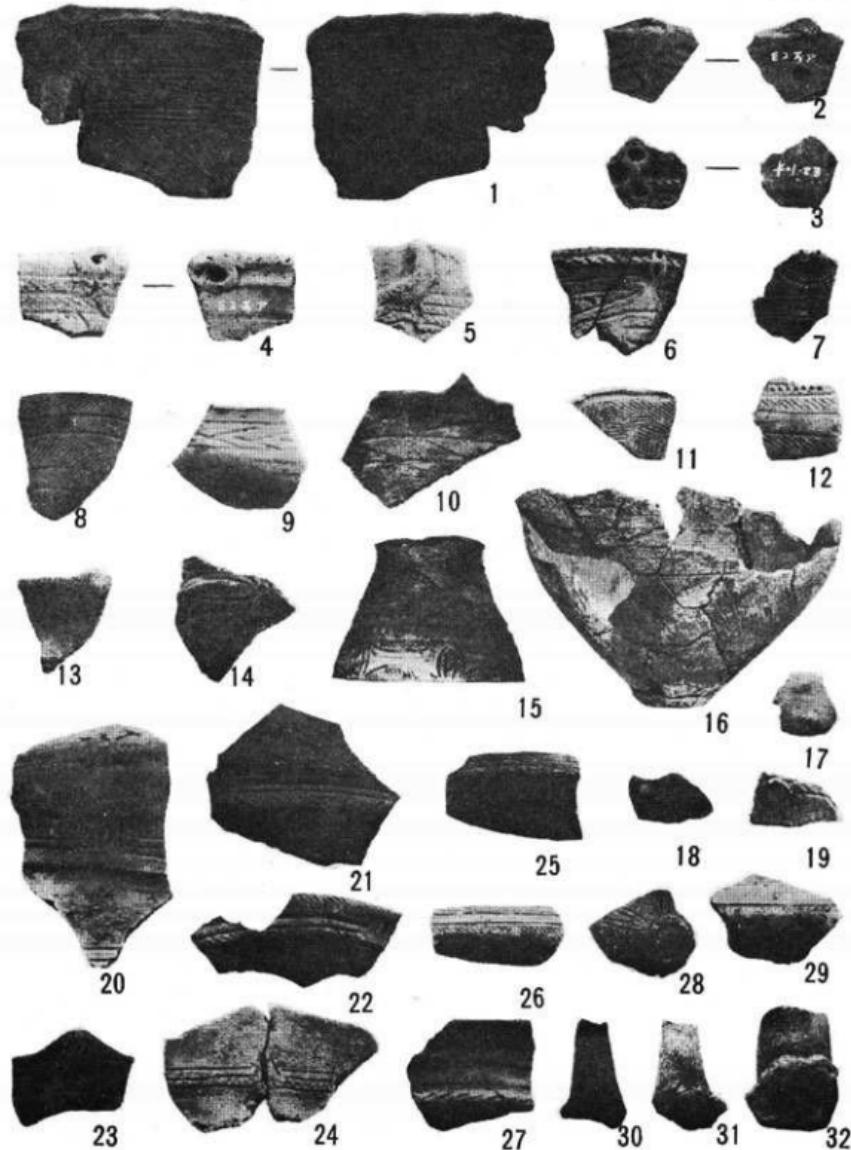


縄文時代中期中葉の土器 S=1/4

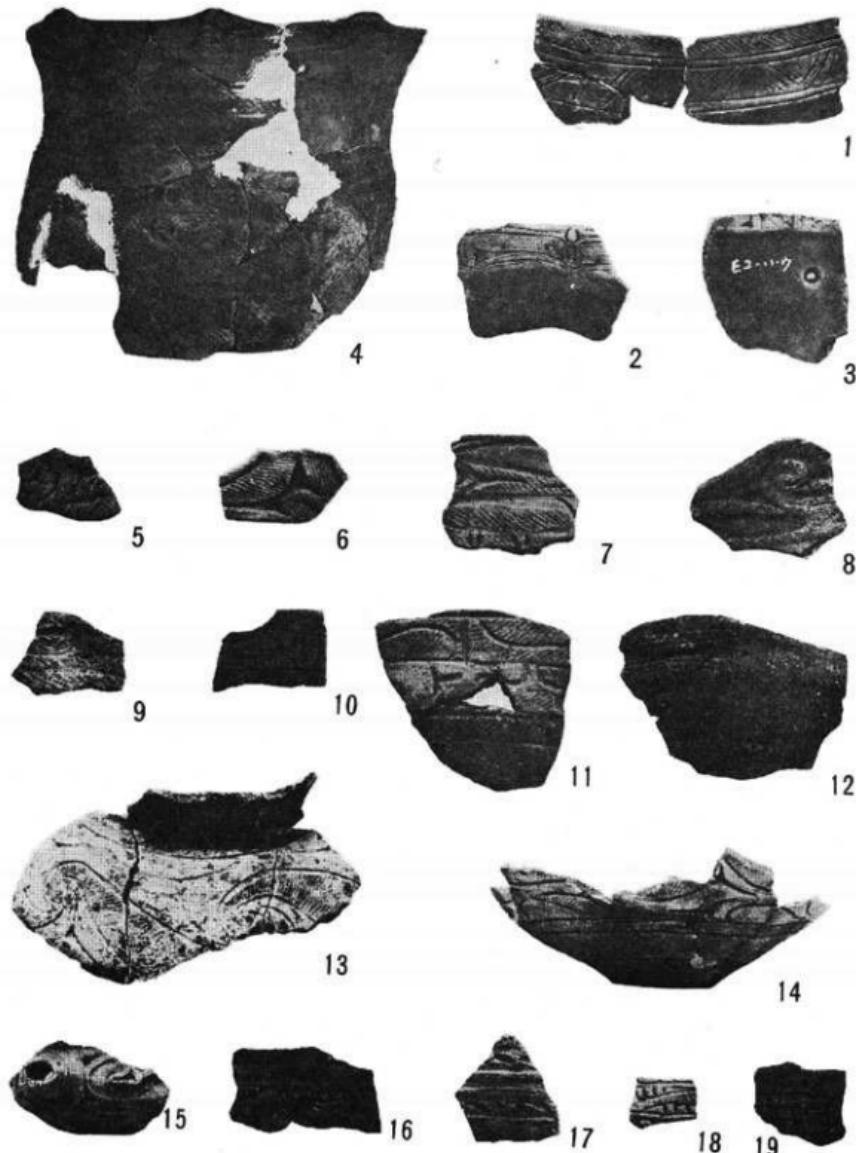


縄文時代中期前葉～末葉 S = $\frac{1}{4}$ (1~11) 縄文時代後期初頭の土器 S = $\frac{1}{8}$ (12~24)
(20)

図版 10



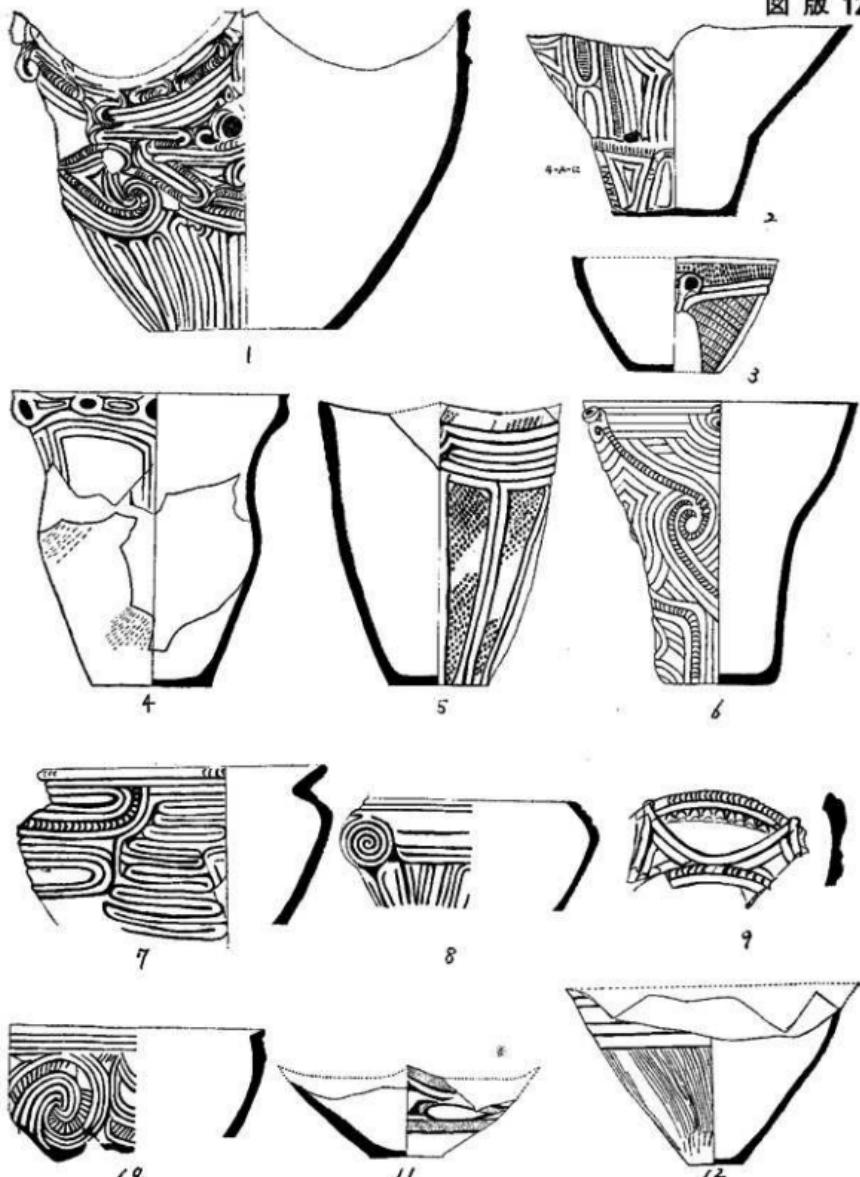
縄文時代後期中葉～後期末葉の土器 S=1/3



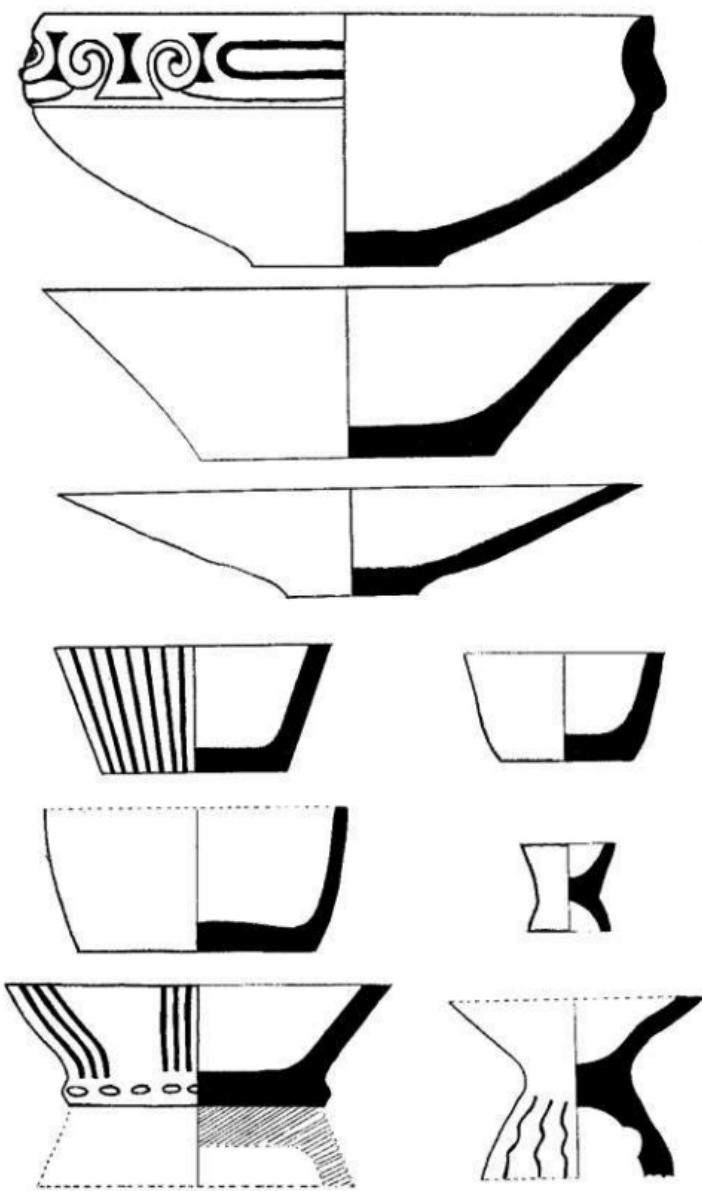
縄文時代後期終末～晩期中葉の土器

$S = \frac{1}{6}$

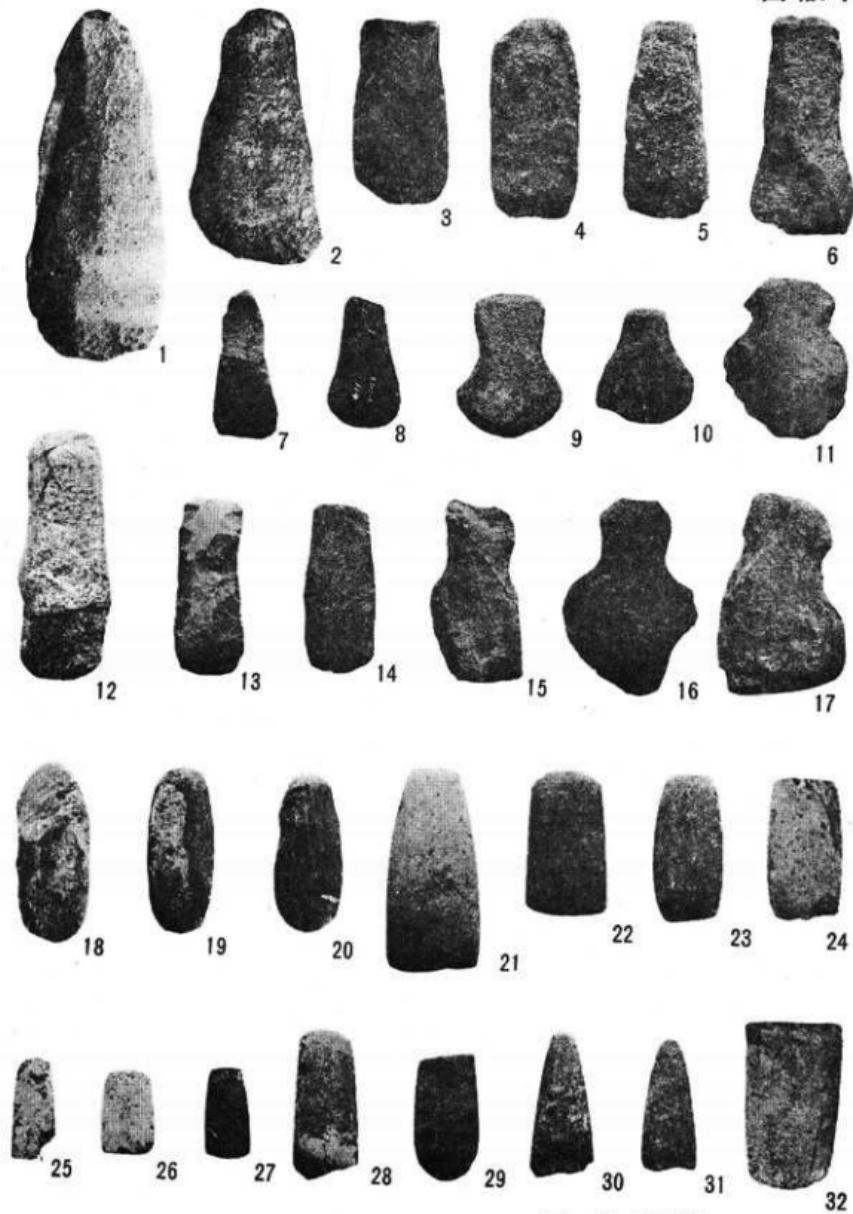
図版 12



縄文時代中期～後晩期の図 S = $1\frac{1}{2}$



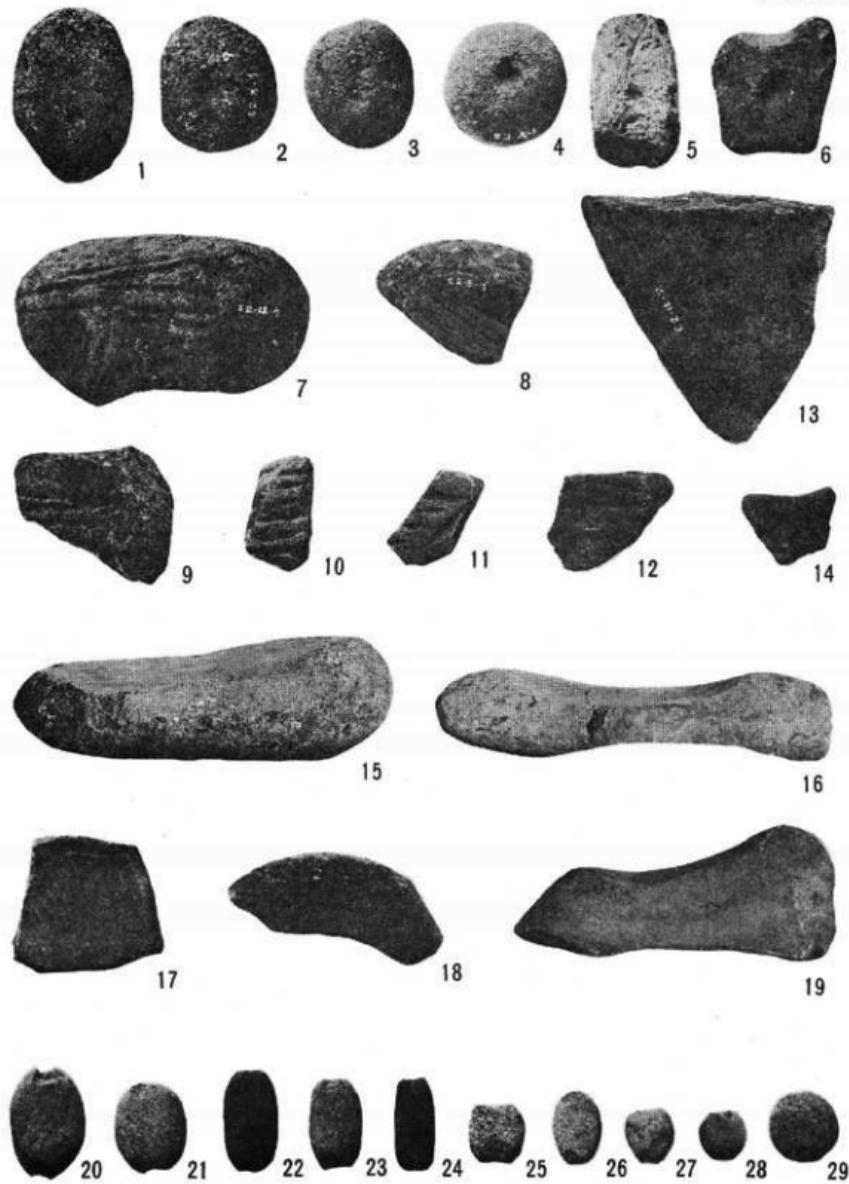
土器底部の図 S = ½



石 器 (石斧)

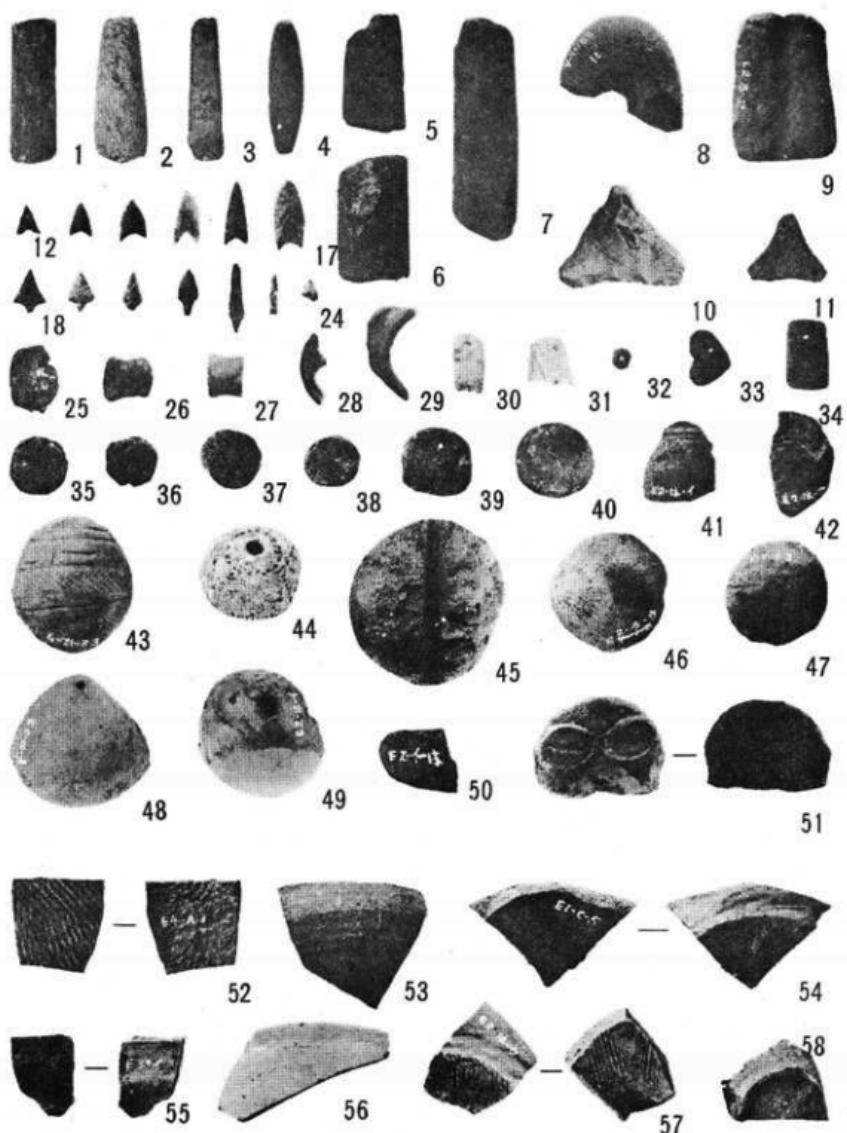
$S = \frac{1}{4}$

図版 15

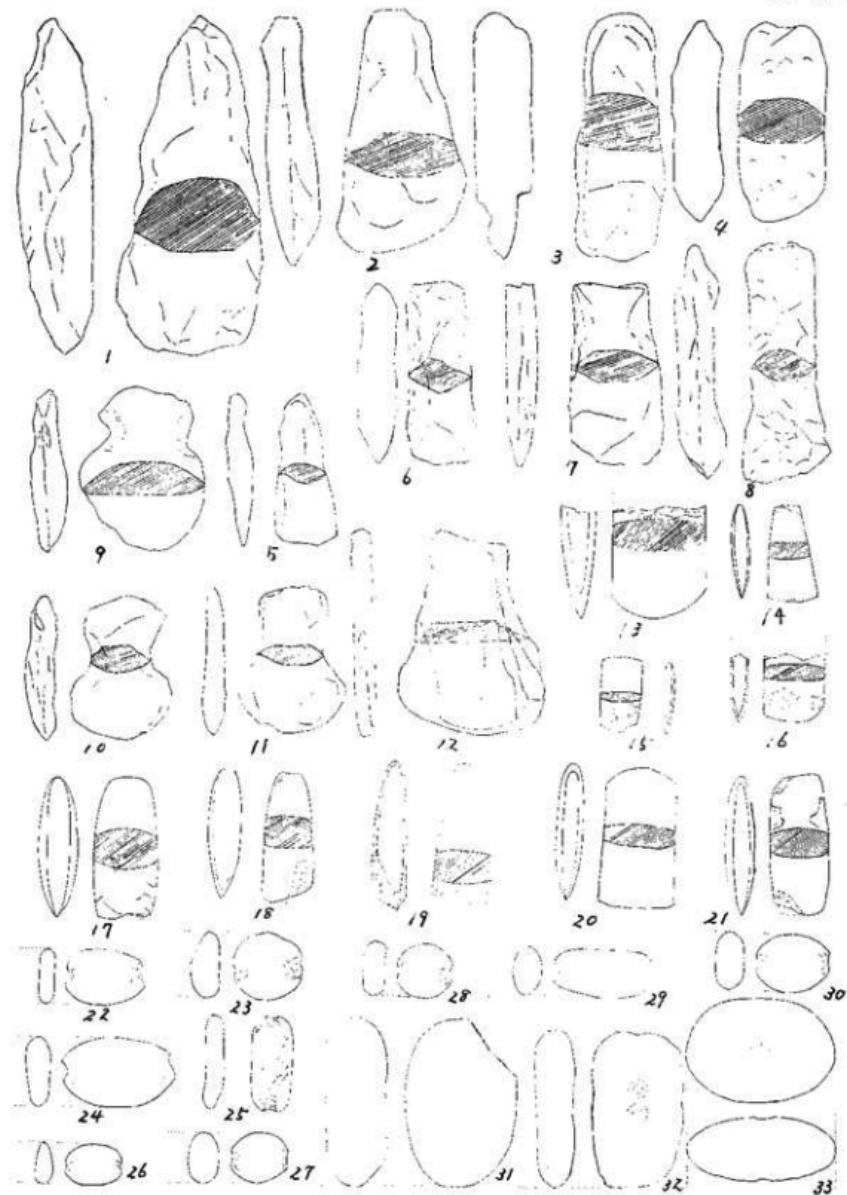


石 器 (石錘・砥石・凹石) S = 1/4

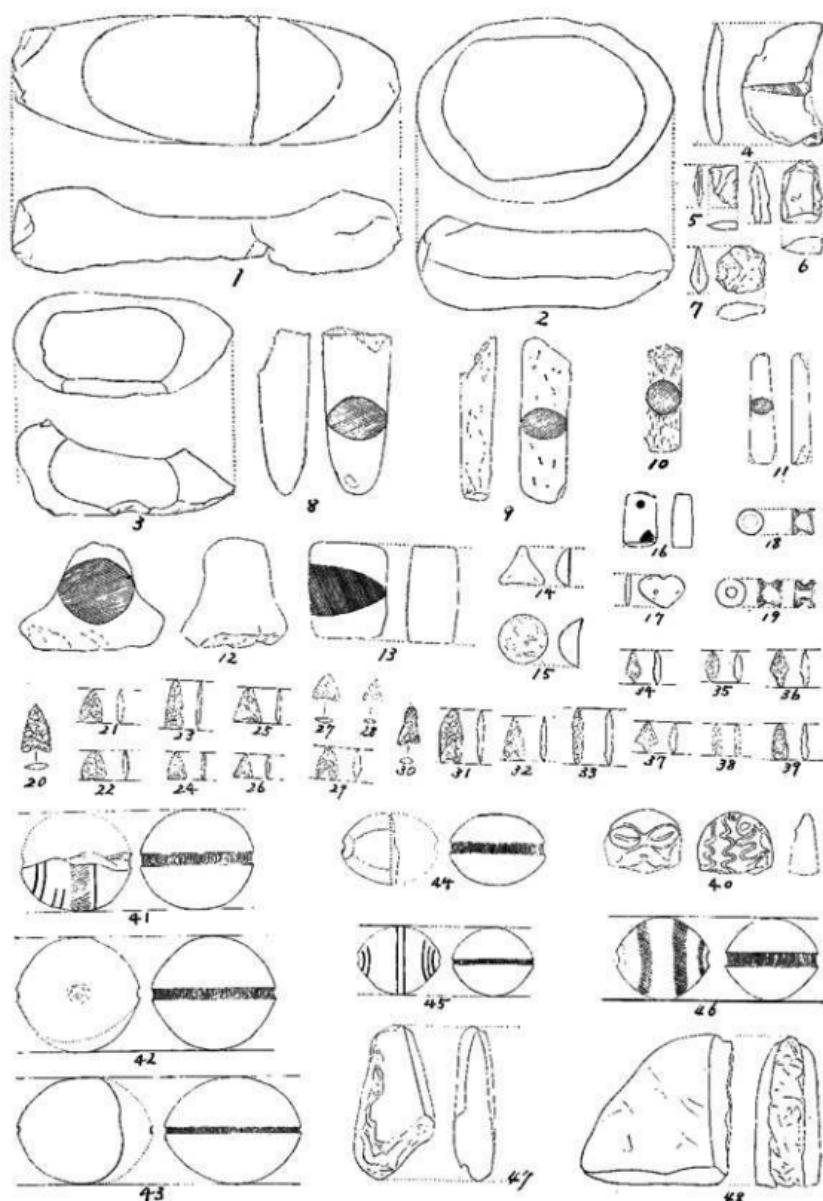
図版
16



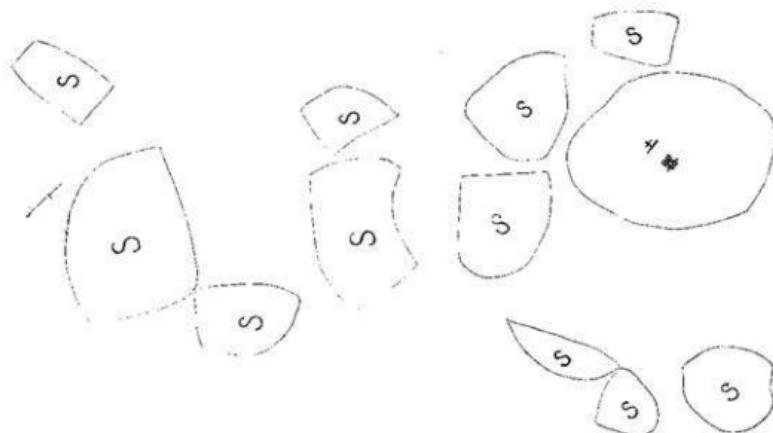
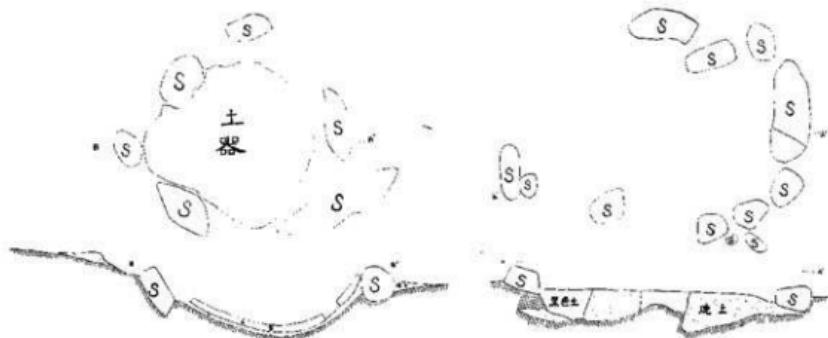
石器・その他の遺物 S = $\frac{1}{8}$



石器の図 S=1/4

石器・その他の遺物図 $S=1/4$ (1~3は $1/2$)

図版 19



右上の図 —— 第1号住居址の炉址

左上の図 —— 第4号住居址の炉址

右下の図 —— 第2地点の炉址

左下の図 —— 第1地点の炉址

炉址図 S = 1/10



遺物の出土状況



第3地点層位



第3号住居址の周構



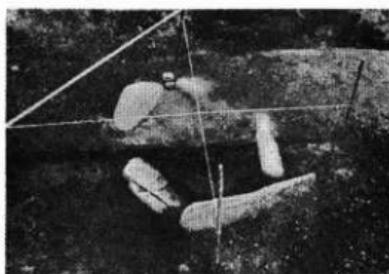
第 2 地点 石 敷



第 3 地点 発掘 状態



第1号住居址の炉址(1)



第4号住居址の炉址(2)



第7号住居址の炉址(3)



第2地点の炉址(4)



第3地点住居群(5)

